

武蔵野日曜聖書講筵

幕屋の原相

——マタイ伝第18章20節——

1989年10月8日

小池辰雄

出会いの幕屋 天幕の構造 動在 信行・信入・信交 一つとなること 十字架という門 眞の幕屋 永遠の贖罪 幕屋の原相 (詩)「人は誰しも」

【マタイ18】

20 二、三人わが名によりて集まる所には、我もその中に在るなり。

●出会いの幕屋

ゲートルは聖書を本当に読んだ。いわゆる註解書などで読まない。本当に身読した。身体で読んだ。だから、身につけている。ゲートルの文学が素晴らしいのは聖書が溶け込んでいくからです。何といつても、聖書は本当の意味で内容が宇宙的ですから。そういうことを普通のクリスチャンはなかなかつかめない。

今日は「幕屋」のお話をいたします。まず、旧約聖書の出エジプト記31章7節を開いてください。

「7 即ち集会の幕屋、律法の櫃、その上の贖罪所、幕屋の諸々の器具、8 案ならびにその器具、純金の燈台とその諸々の器具および香壇、9 燔祭の壇とその諸の器具、洗盤とその台……」(出エジプト31・7〜9)

「集会の幕屋」とは「出会いの幕屋」ということで、神さまとの出会いの幕屋です。神さまとお話するのに、特別に幕屋を造ったわけです。天幕のことです。「律法の櫃」とは、モーセの十誡、律法を納めてある箱で、これはもちろんシナイ山を通つてからの話です。「純金の燈台」は「メノラー」という。これはだいぶ後の、でき上がった幕屋の構造なんです。出エジプトして、出会いの幕屋を初め造った頃はこんなものはみなありはしない。本当にそこで祈つたということ。ただ、幕屋の中身としては、ここに書いてあるとおりです。ここで大事なことは7節の、

「出会いの幕屋、律法の櫃、その上の贖罪所」

ということ。幕屋の真ん中に律法の櫃があつて、その上に両側から天使が羽を伸ばしている。これは不思議なことです。箱があつて、その上に贖罪所があつて、両方から天使が羽を伸ばして向かい合っている。贖罪所が律法の箱の上にある。「律法の箱」は旧約の世界です。「贖



罪所」は新約の世界です。自然にそういうようになっている。贖罪所には天使がそこで祈っていて、神さまがそこに臨んでくるといふわけです。この構造は非常に大事です。それから、出エジプト記33章7節に、

「7 モーセ幕屋をとりてこれを營の外に張りて營と遙かに離れしめ、之を集会の幕屋と名づけたり。

「集会（出合い）の幕屋」というのは、ヘブライ語では「オーヘル・モーエードウ」という。

凡てエホバに求むることのある者は出でゆきて營の外なるその集会の幕屋にいたる。8 モーセの出でて幕屋にいたる時には民みな起ちあがりて、モーセが幕屋にいるまで各々その天幕の門口に立ちてかれを見る。9 モーセ幕屋にいれば雲の柱くだりて幕屋の門口に立つ。

これは霊的な雲、霊雲です。

而してエホバ、モーセともいいたまう。10 民みな幕屋の門口に雲の柱の立つを見れば民みな起ちて各々その天幕の門口にて拜をなす。11 人がその友に言談ごとくにエホバ、モーセと面をあわせてものいいたまう。モーセはその天幕に帰りしがその僕なる少者ヌンの子ヨシユアは幕屋を離れざりき。」（出エジプト33・7〜11）

ヨシユアはモーセのあとを継ぐ男です。ヨシユアはカナンに入る時に偵察に出かけて行つたくらいですから。今読んだところは大事なところですよ。これがむしろ原の相、原相の方です。幕屋の原相とは「もとのかたち」という意味です。そういう歴史的な事実が前にあつたわけです。

申命記31章14節から16節に、

「14 エホバまたモーセに言いたまひけるは、視よ汝の死ぬる日近し、ヨシユアを召してともに集会の幕屋に立て、我かれに命ずるところあらんと。モーセとヨシユアすなわち往きて集会の幕屋に立ちけるに、

ここはモーセの最期のところだ。

15 エホバ幕屋において雲の柱の中に現れたまえり。その雲の柱は幕屋の門口の上に駐まれり。16 エホバ、モーセに言いたまひけるは汝は先祖たちとともに寝らん……。」（申命記31・14〜16）

こういうわけで、最後に言われるわけです。

悪いことをすると、神さまの怒がくることがその後書いてあります。

「幕屋」という言葉は旧約にはまだたくさんあるんですが、民数紀略11章24節には、

「長老たち七十人を集めて幕屋の回りで云々」

と書いてある。詩篇15篇1節、61篇4節。イザヤ書16章5節、ここでは

「ダビデの幕屋」



という言い方をしている。神殿になると、幕屋の構造は大変なもんです。そのことはまた別な時にしましょう。今日は新約の方に入っていく。

● 天幕の構造

新約の方では、マタイ伝18章20節です。

「二、三人が集まって我が名の中へ入ったら、その人たちのただ中に我は在る」

(マタイ18・20 私訳)

これは私がギリシア語を直訳した。

「その人たちのただ中に我は在る」

であって、「我も在る」ではない。

私が幕屋のことに気がついたことは、著作集第十巻の「10月8日 幕屋の原相」の項に書いてある。天幕の構造で一番簡単なものがa、b、cの三点を底面とする三角垂体です。十字架の柱が真ん中に立っている。十字架の頂点は神・キリストです。人間の社会で一番単純なのが、算数でいうならば、三人だね。頂点が神(G)とするなら、Ga、Gb、Gcという、神・キリストとの関係が、一人びとりが縦につらなる。この縦の関係がなければ天幕は成り立たない。これがあれば、ひっくり返らない。ひっくり返らないためには、この大黒柱(垂線GX)がなければならぬ。これ(垂線と底面の接点)はキリスト(X)です。キリストという大黒柱、十字架の柱です。そして、この空間は聖霊の世界です。これが実は、「エクレシア」いわゆる「教会」の本当の相^{すがた}だと私は気がついたから、「幕屋」ということを言いはじめた。

● 動在

創世記から黙示録まで、幕屋という言葉は出ています。特に幕屋はしょつちゅう動いてる。動的なんだ。動在です。これは旅だから。旅のすがたです。神の歴史も旅です。新天地に向かつての神さまの旅の歴史ですから、我々もその一環を承っているというわけです。キリストが

「二、三人が集まって」

と言った。二人だつていい。ある時は、一人だつて構わない。一对一の、本当は一人なんだ。預言者や使徒はみな一人です。召命を受けたときには一人なんです。それがおのずから複数になるわけです。

だから、この縦の関係が立って——この縦の関係が立つことを「平安」(シャーロム)という——それから横の「平和」になる。しかも、これ(a、b、cの底面)は三角形だけれども、いわゆる三角関係ではない。平面の三点は必ず円をえがく。幕屋は本当は、三角垂体でなくて、円錐体なんだ。我々のお互いの関係は円、還関係でなくてはダメなんです、角張っていたら。



そういう関係に入ることを「円現^{えんげん}する」という。

丸いもの。いかなる天体もみんな丸です。四角の天体があつたら、見せてもらいたい。天体はみな丸い。グルグル回っている。しかも球形だ。地球もそうだ。地球は水でもっている。海から蒸発して水がグルグル回っている。地球は本当は地球でなく水星水球なんだ。ギリシアの最初の哲学者のターレスが

「水がもとだ」

と言ったのは、私は素晴らしい真理だと思う。

● 信行・信入・信交

「一、二人が集まって我が名の中へ入ったら、その人たちのただ中に我は在る」

ただ集まっただけではまだダメなんだ、キリストの名の中に入っただけでいいから。信仰は、初めは仰いでいる。これは信仰の第一段階だ。いわゆる「信仰」は第一段階の信仰ばかりやっている。信じ行かなければ、入っただけでいいからダメなんです。信行、信入です。

「わが名の中へと信じ入れ」

ということ。キリストの名というのは、名が実を現していますから、キリストという実体の中に自分を投げ入れることが本当の信仰です。これが「信行」です。そうすると、自分を投げ入れたところの状態は何かというと、信じ交わる状態になる。今度は「信交」になる。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

ということだ、

「エン・クリスト（キリストの中に）」

というのはこの世界です。パウロの実存はここにあつたから、もの凄いことになった。ガラテヤ書のパウロは凄い。

もういい加減なことではしょうがないですよ、21世紀はどんなことになるか知らん。だから、あなた方一人ひとり、あなたが本当に身体で証しなくちゃ、身証しなくてはね。存在で証しする。キリストの身証者ということなんです。

「それはいかにしてか？」

ではない。まず、キリストの中へ入らなくては。

「神の業は何ですか？」

と聞いたたら、

「信ずることだ」

とキリストが仰った。あれは

「の中へと信入する」

ことなんです。あそここのギリシア語はそうなっている。



●一つとなること

我々は空気を思つて生きてはしないんだ。空気の中で、空気を吸つて、空気と一つになつて生きている。魂も同じように、キリストを思つたつてダメなんだ。

「我を見よ」

と使徒たちが言ったでしょ。あれは本当にキリストと一つになっているから、

「我がうちなるキリストを見よ」

と言えた。仏教の世界だつてそうですよ。如来と一如となっている超一流の坊さんはみなそうだ。だから、彼らは凄かった。もう絶対に観念信仰ではどうにもならんということははっきりしている。そのかわり、一如となつてその世界は即ち聖霊の世界なんです。入っている世界は、もうこれは御霊の世界です。神・キリスト・聖霊が一つになっている。

「聖霊を受けざればキリスト者にはあらず」

とパウロがはっきり言っている。

「聖霊を受けるとはどういうことか？」

なんて、すぐみんな対象的に考えるからいかん。一つとなる、ことと同じことだよ。

●十字架という門

十字架という門から入りなさい。無条件に誰でも入れる。どんな罪びとでも、罪人であろうとも。誰でも十字架を通れない人は一人もいない。無条件ですから。十字架でもって完全に贖いきつてくださっているんだから。どうして、キリストが贖いきつているということを受けとらないかと思うね。

「まだ私の信仰は…」

なんて、自分の信仰なんか問題にする必要はひとつもないですよ。本当にキリストの中に入ってしまったって——そして、何と言いますかね、我もなく人もなしという——

「ゼロ〓無限大」

の世界に入る。それから、あなた方の才能がどんどん使われていく。

政教分離というけれども、それは対象的には分離の世界だよ。けれども、政治家そのものが本当に宗教の世界をもたなければ、本当の政治はできない。それを証したのが、グラッドストーンなんだ。リンカーンなんだ、ビスマルクなんだ。そういうことをもう大胆に今は言わなければだめだ。私は何とかわれたつて一向差し支えない。何と言われようと、どう扱われようと、一向差し支えない。どうぞ、そういうところに入つてくださいよ。そうしたら、あなた方は女の方でも光を発するから。本当の底光を発する。

「二、三人集まって我が名の中に入ったら、そうしたら、その人たちの中に私はいるよ」

とキリストは言う。



忠臣蔵の四十七士は、あれはみんな三人組だ。三人組で吉良上野介の館に押しかけていった。三人の力でやったから一人も怪我しない、一人も斬られない。だから、三人組というのは凄いな。さすがは、大石内蔵助くらのすけというのは凄いな。皆さんも、友だちで

「さあ、二人集まって集会しましょう」と。いいよ、休みのときには、一人で身読でも、三人で集会でも。別に三人にこだわらなければいいよ。

教会の、エクレシヤの一番簡単な原相はキリストのこの言葉です。

「二、三人が集まって、わが名の中に入れ。そうしたら、そこが本当の教会だ、本当のエクレシヤだ」

と。キリストが来たら聖霊が臨む世界だから。聖書の言葉は、

「わが言は霊なり生命なり」

で、決して意味ではない。霊であり生命である。聖書を読んでいて、生命が、力が、光が来なかったら、本当は読んではいないということだと、はつきり自覚してください。

「これはどんな意味だ」
なんて、意味ではない。

「参りました！」
と、聖書には降参しなければだめなんだ。降参すると、本当のその世界に入れるドラマだから、聖書というドラマの中に入れる。

●真の幕屋

それでは、新約聖書で大事なところを少し引用します。へブル書8章1節から、

「1今いう所の要点は斯かくのごとき大祭司の我らにあることなり。

「大祭司」とはキリストのことです。

彼は天にて稜威みいつの御座みくらの右に坐し、²聖所せいじよおよび真まじとの幕屋つかに事つかえたもう。この幕屋は人の設たてくるものにあらず、主の設けたもう所なり。³おおよそ大祭司の立てらるるは供物そなえものと犠牲いけにえとを献けんげん為なり、この故に彼もまた献けんぐべき物あるべきなり。⁴然るに若し地に在いまさば既に律法りつぽうに循したがいて供物を献けんぐる祭司等あるによりて祭司とはなり給たまわざるべし。⁵彼らの事つかうるは、天にある物の型と影となり。

こんな地上のものは「影」であるという。

モーセが幕屋を建てんとする時に『慎つつしめ、山にて汝が示されたる式かたにならいて凡すべての物を造れ』との御告みつけを受けしが如し。⁶されどキリストは更に勝まさる約束に基づきて立てられし勝れる契約の中保なかだちとなりたれば、更に勝まさる職つとめを



受け給えり。7かつ初めの契約もし欠くる所なくば、第二の契約を求むることなかりしならん。

「第二の契約」とはキリストの契約、新契約、新約のことです。

8然るに彼らを咎めて言い給う『主いい給う「視よ、我イスラエルの家とユダの家とに、新しき契約を設くる日來らん。」

これはエレミヤに告げた言葉（エレミヤ記31・31〜34）です。

9この契約は我かれらの先祖の手を執りて、エジプトの地より導き出しし時に立てし所の如きに非ず。

いわゆるモーセの幕屋とは違うんだと。

彼らは我が契約に止まらず、我も彼らを顧みざりしなり」と、主いい給う。

10「然れば、かの日の後に我がイスラエルの家と立つる契約は是なり」と主いい給う。「われ我が律法を彼らの念に置き、その心に之を記さん、また我かれらの神となり、彼らは我が民とならん。

これはエレミヤ記に出ている言葉を引用した。

11彼等また各人その国人に、その兄弟に教えて、なんじ主を知れと言わざるべし。そは小より大に至るまで、皆われを知らん。12我もその不義を憐み、

この後また其の罪を思出でざるべし』と。

これはエレミヤ記にもあるし、

「もう忘れてしまふぞ、そんなものは」

というのはいざや書にもある。とにかく、いざやとエレミヤというのは大変な預言者です。もうその中に新約が入っている。新しき契約のことを、

「墨で書くのではない。お前たちの身体の中に、心の中に記すぞ」

という。そういう契約だと。

13既に『新し』と言ひ給えば、初めのものを旧しとし給えるなり、旧びて衰うるものは、消え失せんとするなり。」（ヘブル8・1〜13）

●永遠の贖罪

それで今度はヘブル書9章がまた非常に大事なところですよ。1節から、

「1初めの契約には礼拝の定めと世に属する聖所とありき。2設けられたる幕屋あり、前なるを聖所と称え、その中に燈台と案と供えのパンとあり。3また第二の幕の後に至聖所と称うる幕屋あり。4その中に金の香壇と金にてあまねく覆いたる契約の櫃とあり、この中にマナを納れたる金の壺と芽したるアロンの杖と契約の石碑とあり、5櫃の上に栄光のケルビムありて贖罪所を覆う。」



これはさつき読んだところと似てますね。

これらの物に就きては、今一々言うこと能わず、⁶此等のもの斯く備わりたれば、祭司たちは常に前なる幕屋に入りて礼拝をおこなう。⁷されど奥なる幕屋には大祭司のみ年に一度おのれと民との過失のために献ぐる血を携えて入るなり。

中国の北京に天壇というのがある。これは三重になつていて大理石の壇です。清朝時代の天子（皇帝）が一年に一回ここで国民のために執成しの祈願をしたそうです、大祭司と同じように。これは景教がきて——ユダヤ教とキリスト教はシルクロードを通つてかなり東へ入つてきている——多分私はその影響がきていると思う。ユダヤでは羔羊だけれども、ここでは牛なんだ。

⁸之によりて聖霊は前なる幕屋のなお存するあいだ、至聖所に入る道の未だ頭れざるを示し給う。⁹この幕屋はその時のために設けられたる比喩なり、之に循いて献げたる供物と犠牲とは、礼拝をなす者の良心を全うすること能わざりき。¹⁰此等はただ食物・飲物さまざまの濯事などに係わり、肉に属する定めにして、改革の時まで負わせられたるのみ。

旧約の型はそういうことをやっただけでも、それではまだ本当の世界ではないんだということをお願いしたいわけです。それからあとが大変だ。

¹¹然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大いなる全き幕屋を経て、¹²山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまへり。

キリストにとつての「至聖所」というのは十字架のことです。彼自身が祭司となり、彼自身が羔羊となつたということなんです。だからもう、過去・現在・未来の贖罪が一遍で済んでしまつた。

¹³もし山羊および牝牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉体を潔むることを得ば、¹⁴まして永遠の御霊により潔くして己を神に献げ給ひしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事えしめざらんや。¹⁵この故に彼は新しき契約の中保なり。これ初の契約の下に犯したる咎を贖うべき死あるによりて、召されたる者に約束の永遠の嗣業を受けさせん為なり。……²⁰『これ神の汝らに命じたもう契約の血なり』と。……

……²⁶然れど今、世の季にいたり、己を犠牲となして罪を除かんために一たび現れたまへり。²⁷一たび死ぬることと死にてのち審判を受くることとの人に定まりたる如く、²⁸キリストも亦おおくの人の罪を負わんが為に一たび献げられ、復罪を負うことなく、己を待ち望む者に再び現れて救を得させ給うべし。』（ヘブル9:1-28）



再臨のことだ。ヘブル書というのはヘブル人たちに
 「旧約の世界から新約の世界に入れ」
 ということを滾々と語っているわけです。

●幕屋の原相

ヨハネ伝1章14節に、キリスト自身が我々の中に入って「幕屋した」という言い方がある。

「言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。」(ヨハネ1・14)

この「宿る」という字は「幕屋を張る」という字です。

「我々の間に幕屋を張った」

という言い方をしている。ギリシア語では「スケーネー」という。

では、第十卷(『聖書は大ドラマである』)の「10月8日 幕屋の原相」(マタイ18・20)のところを読みます。

「二、三人が集まって我が名の中へ入ったら、その人たちのただ中に我は在る。」(マタイ18・20)

「この聖言はマタイ福音書だけにある。神・キリスト・我という縦の垂直関係は、聖霊の媒介によって四位一体的に成り立つ。これが宗教的実存の原相である。

キリストの右掲の聖言は、エクレシヤ(教会、召団)の原相である。キリストの名の中へと入るためには聖霊が臨んでいなければならない。聖霊内住の前提的土台は十字架の贖罪を体受するところに在る。右の事態を図形的に表現すれば、十字架の柱を中央に立てて、三角垂体の幕屋(天幕)を張ると、頂点をS(十字架の頂点)としたS—a・b・c(a・b・cは平面上の各個人)という一番単純な三角垂体の幕屋が張れる。幕屋の空間は聖霊が充滿している。私はこのことに一九四二年三月八日にヒルティの『眠れぬ夜のために』の第一巻(ドイツ語原文)のこの日付の処の最初くだりを読んだとき靈感の如く閃いたのであった。幕屋!という語が。

ヒルティはそこで幕屋のことを言っているのではないですよ、

「未だかつてキリストが望んだようなエクレシヤはないのだ」

ということを書いてある。それで、私はそれは何だろうと思って——私は病床について寝て読んでいた——その時に、ハッと旧約の幕屋のことが頭に浮かんだ、

「ああ、幕屋が本当のかたちだ。動的なキリストのすがただ」

と。それで、私は自分で幕屋と言いだしたんです。それは1942年だ。私は集会を始めしたのは1940年だけれども、初めはまだ無教會的な信仰だった。それでも、無教會の信仰にはあきたらないから、始めたんだけど。



ヒルティはそこで『キリスト教団は未だ嘗て一度もその創設者（キリスト）の考えに完全に適合した全く正しい形成を見たことがない』と言っている。幕屋！即ちイスラエルに自現したエホバ（ヤハウェ）の神は幕屋を張りながら民と旅をしている。創世記から黙示録まで、即ち神の歴史は神が人と幕屋を張りながらの旅で、創造の晨から歴史の終末、新天新地の神の国の到来まで、幕屋がエクレシヤの本態である。原相である。キリストのこの聖言がそれを指示している。」

と。それが正に幕屋の原相であると同時に、それはどんな場合においても本当だということとです。二、三人であろうと、十人であろうと、百人であろうと。そういうことで、私たちは幕屋を「召団」と言っている。これは藤井先生が「エクレシヤ」をそのように直訳したから、召団になったんだけれども。召団の本当のところは幕屋です。

その「幕屋」を手島（手島郁郎1910～1973/12/25）さんが「これはいい」と言って使いました。仮名でもって「マクヤ」と書くと、これは手島さんの大集団のことになってしまふ。イスラエルでも、イスラエル人も知っているんです。これはもとをただせば私から発している。彼らとごっちゃにされては困るから、私は召団というのを別に使っているけれども、私の集会は本来は

「武蔵野幕屋」

というんです。

手島さんは私をよく分かってくれました。私も手島さんをよく知っている。彼は鉱石みたいな人だから、ダイヤモンドもあればドロもあるし、いろいろです。まあ、人間は誰でもそうだけれども。その人のダイヤモンドは何かということを見て、お互いに交わらないとね。そのことを私は今度の詩の『人は誰しも』に書いた。

我々は、そういった活ける生命の幕屋として、お互いに本当にながちり組んでいく。「がっちり組む」といつても、人間的に組むのではない。御霊のあるところには必ずそれが展開していく。問題は

「聖霊の愛が本当に融けているか」

ということとです。もう、言葉ではない。「聖霊の愛」ということを本当に言ったのは手島君だ。それは本当に至言だと私は思った。

●(詩)「人は誰しも」

『人は誰しも』（作詞1989年8月20日。中山晋平作曲、白秋の「行こうか戻ろっか」の歌調で）

1 人は誰しも

長所と短所よとろえ

互いに美点

みとめ合い

落度見棄てて

交りゆけば



- 2 雲は遁げゆき
人は誰しも
されど互いに
交るところ
そこに花咲き
- 3 人は誰しも
不遇の時に
愛し^{いたわ}勞り
天の涙に
人は誰しも
パリサイになる
かかるときしも
語り合つこそ
- 4 十字架の贖罪に^{ゆるし}
うちに^{みたま}聖靈の
さればいかなる
忍び^{にな}荷いて
十字架はイザヤ書
聖靈はイザヤ書
- 5 これぞキリスト！この主にいつも
祈り入りてぞ
自然も国土も
個人も^{ひと}国家も^{くに}
然るに^{しか}慾の^{よく}
サタンは世界を
人は誰しも
- 6 つみびとならずや
神の御前に
いつか世界は
- 7 陽は光る
躓く^{つまず}ものぞ
ゆるし合い
喜びが湧く
鳥歌う
- 8 ドラマの中ぞ
思い遣り^や
助くるところ
虹が立つ
噂^{うわさ}や陰口^{かげぐち}で
虞^{おそ}れあり
十字架のもと
いと善けれ
救われし我
力あり
誹謗^{そしり}も迫害^{せめ}も
祈りぬく
- 9 五三の預言
三五の現実
- 10 この主の中に
生命あり
渦巻^{うずま}きのため
掌^ての中に
救済^{すくい}を要する
世の人よ
平伏^{ひれふ}さざれば
カタストローフエ
大破局！

